



20年の時を経て

井上久夫

2015年8月末から2016年3月中旬まで、在外研究員として北米のマサチューセッツ大学アマースト校 (University of Massachusetts Amherst) に留学いたしました。そして、その期間に、ヴァージニア州アシュランドにあるランドルフ・メイコン大学 (Randolph-Macon College) **【写真右】**を訪ねることができました。

R-M Cを訪れた理由は二つあります。一つは、関西学院の創立者 Walter Russell Lambuth の手紙やはがきが R-M C の図書館に保管されているかもしれないとの情報を、学院史編纂室の池田裕子さんから得ていましたので、その有無を確かめたかったからです。いま一つは、聖和大学で教鞭を執っていた20年前に、在外研究員として留学いたしました先が R-M C であり、その折にお世話になった一組のご夫妻にお会いしたかったからです。

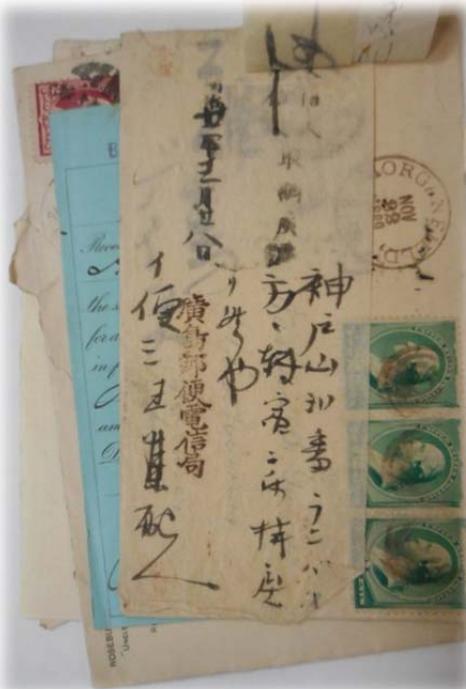


R-M C McGraw-Page Library では、Archives/ Special Collections を担当している Mary Virginia Currie さんに協力していただき、W. R. Lambuth と関連する可能性があると思われる資料を見ることができました。W. R. Lambuth の名前を見つけることができるかもしれないとワクワクしながら目を通したのですが、残念ながらその名を見つけることはできませんでした。ただ、彼の父 James William Lambuth の名前や「神戸 山式番…」が記された封書を見ることができました **【写真左】**。1887年8月ごろからしばらくの間、関西学院の創立者 W. R. Lambuth、そして彼の母であり、聖和の基を築いたお一人である Mary Isabella Lambuth (現在の聖和キャンパスチャペルにその名が冠されている) 等がそこに住んでいたのです。感慨深いものがありました。20年前には全く意識していなかった「ランバス・ファミリー」が身近に感じられた瞬間でした。

R-M C にて、ランバス・ファミリーとの接点があるかもしれないと思われる資料を写真に収め、Virginia さんに揃えていただいた資料と併せて学院史編纂室へお持ちしました。ほんの少しでも役に立ってくれればと願っています。

ところで、R-M C 訪問のもう一つの理由は、先ほど少し触れましたが、20年前にお世話になった John & Mary Adams ご夫妻にお会いし、親交を深めたかったからです。お二人に初めてお会いしたのは R-M C 近くの First Baptist Church の夕食会でした。キャンパスのすぐ近くにお住まいでしたので、たびたび家に招待してくださり、家族の一員のように接してくださいました (現在は、アシュランドから車で30分程離れた所にある高齢者住宅にお住まいです)。

帰国の際、留学中に購入し、使用していた日本製の電気炊飯器 (rice cooker) を皿や碗と一緒に置き土産としてご夫妻に差し上げました。しかし、小生はそのことをすっかり忘れておりました。ところが、このたびお会いした時、その炊飯器で炊いたご飯を夕食に出してくださいました。20年もの間、大切にそれらを使ってくださっていたのです。驚きと感謝が入り交ざった感情がこみ上げてきました。その感情をぐっと抑えながら食事をいただきました **【次頁写真: 左より Mary さん、筆者、John さん】**。



アマーストへ戻る朝、小生のアパートに炊飯器がないことを知ったお二人は、その炊飯器を大きな袋に入れてくださいました。小生はそれを持って、R-M C キャンパスの敷地内にあるアムトラック（日本のJRに相当するような鉄道会社）のアシュランド駅から北へと向かいました。



その後5ヶ月間、アマーストのアパートの台所で炊飯器はしっかり働いてくれました【写真右】。それだけではありません。楽しませてくれました。炊き上がりの合図がなんともすてきな音色なのです。「ちーん」という響きがなんともいいのです。ただ、鼻歌を歌い終わると同時に炊き上がった場合だけはショックを受けましたが、それ以外はその心地よい響きを楽しみました。



ところが、3月、帰国する段になると、この炊飯器をどうしようかという思いがふと頭をよぎりました。「邪魔になる」と思ったのです。20年もの間、働き続けてきたこの炊飯器を、Johnさん Maryさんご夫妻が大切に使ってくださいました炊飯器を「邪魔になる」と思ったのです。そんな自分に愕然としました。一瞬とはいえ、「捨てて帰国しよう」と考えたのです…。

今は自宅の片隅でゆっくりと休んでもらっています。ただ、年に一度は、起きて働いてもらおうと考えています。この炊飯器で炊いたご飯を食べながら、20年間に会った人々や、起こった出来事を思い出しながら、自分がどのように生かされてきたのかを見つめてみたいと思っています。

【教育学部教授】



井上先生からお聞きして感動した話がもうひとつあります。炊飯器を20年にわたり大切に使い続けて来られたAdamsさんご夫妻の暮らす高齢者住宅のホールで、先生は50人の聴衆を前に英語と日本語で聖歌（讃美歌）を歌われたそうです（ホールに出てくることができない方のために、各部屋にも音声が行われたそうです）。オルガン伴奏はJohnさんが務めました。



南メソヂスト監督教会が130年前に開始した日本での宣教活動のために、ヴァージニア州の信徒から多くの献金が寄せられたと伝えられています。関西学院創立の地、原田の森に残るチャペル（現：神戸文学館）に名を残すプランチ家はヴァージニア州の銀行家でした。その教会が創立した関西学院から来た日本人教師が心を込めて歌う聖歌はヴァージニア州の人びとの心に深く響いたに違いありません。

（学院史編纂室 池田裕子）

ランバス一家の通訳を務めた鈴木愿太さんのお墓参り

関西学院を創立したアメリカの南メソヂスト監督教会日本宣教130周年に当たる本年、偶然にもランバス・ファミリーの子孫ディヴィッド・シェレルツさん、関西学院初代神学部長、第3代院長を務めたJ.C.C. ニュートンの子孫アリシア・アンダーウッドさんが来日され、親しく交流することができました。

さらに、函館で開催された外国人居留地研究会全国大会参加の帰途、仙台に立ち寄り、同教会日本宣教の初穂（現在の神戸栄光教会にて受洗）となった鈴木愿太さんの墓参りをする機会を得ました。輪王寺にある北山キリスト教墓地に眠る同氏は、ランバス一家と共に上海から来神した通訳で、来日間もない一家を最も身近で支えた人物でした。関西学院で教えていたこともあります。仙台では、鈴木家と親しくされていた齋藤潔さんとその妻和子さん、甥の悦郎さんに大変お世話になりました。ありがとうございました。

【学院史編纂室 池田裕子】

